



# 「こんな京都に誰がした？俺がした…」 京都CF！300号記念 歴代編集長対談

PART 1

構成／保伊戸肯 撮影／鈴木誠一

こんな京都に誰がした？俺がした…と  
いっても過言ではない、歴代編集長対談  
が実現。「京都CF」という雑誌名の  
ロケの横に、微笑むようにかわい  
く「Club Fanel」というロゴがあること  
を、キミは知っているだろうか。「もともと  
聞かされておもしろいけど、色んな声か  
らして16年、「京都CF」ユニニユー  
ルして早10年というのが300号の内訳。  
創刊から、61号までを編集長として支えて  
きたのが、現在、酒場ライター養成講座主  
宰、様々な雑誌に記事を執筆するなど活躍

中のバッキー井上こと井上英男氏。そして  
現編集長の竹中聡に昨年5月号にバトン  
を渡すまで、街の意見番というかゴキゲン  
さんとして賑やかに街と「ミットしてきた  
元ティスロビューターにして、音響芸人  
「タイムストップバズ」としても活躍する  
など、ユニークなキャラクターで愛されて  
きた、モックン・カスローこと三橋一裕氏。  
保伊戸肯がホストとして、京都という街と  
添い寝してきた雑誌「京都CF」が、  
いかに京都という街をめぐりたい楽しく、  
かつおもろくしていきたいという思いで号  
数を重ねてきたかを語り合った！

## 「A CITY FOCUS」誕生 「なんじゃ」の雑誌は？」

保伊戸(以下・保) 今日、「Club  
Fanel」「京都CF」という雑誌メデ  
アを通じて、京都という街を読み解く  
面白さ、みたいなお話ができたらいい  
な、と。

竹中(以下・竹) 僕は編集長といっ  
てもたかが1年ちょよつと。創刊当時を  
バッキーさん、元橋さんは知っておら  
れると言うことで、その辺をまずは  
ツツコンで訊いてみたいな、と。

井上(以下・井) 一番はじめは…、電  
通というか、BDOやマッキンゼ  
イ・コンソンのような、海外の広告代理店の  
クリエイティブ…。コピーライターが  
いて、アートディレクターがいて、コ  
ンビで様々な仕掛けをしていく、そん  
なのを格好ええなあと考えていて、友  
達とふたりでしようと思っただけ。「ふ  
たり電通」みたいななを(笑)。何も  
分からんまま、「俺の考えているよう  
な表現はソニーとか、アップルマッ  
キントツシユとか、そういうクライア  
ントでないとできひん」と、勝手に思っ  
てん。アホやからソニーとかホンダ  
とか行ったらもん、東京まで。で、「人  
の紹介やから、会うには会ったけど、  
なんですの？」みたいな感じや(笑)。  
とにかく名刺交換できたらええと。な  
ぜならオレは、デキるから。

一同(笑)

井 まあそういう文脈や(笑)。そこ  
で「名刺がわりに写真週刊誌のハシリ  
の『OCCUS』みたいななをつくるん  
いるんな人に会えるかな」と、考え  
たわけや。それで「A CITY FOCUS」  
という雑誌を発行してん。一回でやめ  
るつもりやってんけど。

保 '82年か'83年かぐらいのことです  
ね。あれって、売ってたんですか？  
「なんじゃこの雑誌は？」とビックリ  
したこと覚えてます。



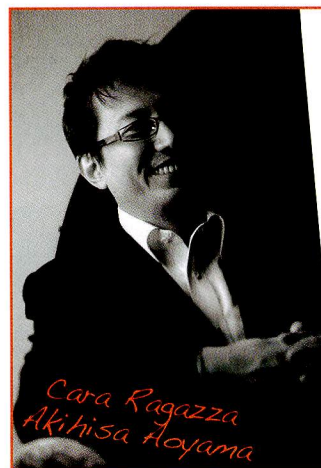
的に配っててん。そしたら「京都に  
『A CITY FOCUS』という新潮社の  
『FOCUS』のバクリっていうたらアカ  
ンねんけど、まあパロディ誌があつて、  
これがなかなか面白い」と、い  
ろんなマスコミの取材を受けてしもた  
んよ。テレビとか雑誌とかいっばい来  
よつたわ。ほんでやめられへんよう  
なつてもてん。オレらは広告マンに  
なる布石にするつもりやったのに、な  
んか知らんまに「ふたりの若者、出版  
社始める！」になつてもたんよ。

保 播ヒロシがやってた木屋町の店  
に坂本龍一とか来たときの写真とか  
まさに街の現場を見事に切り取った写  
真について、あでもないこうでもな  
いって書いていて。いったいこのセン  
スはなんなんだろうかと、構造論  
や記号論をやっているイキつた学生の  
心を驚つかみにする、そんな雑誌だ  
った。街でハチャメチャに遊んでるシ  
ーンを、今のコンパクトデジカメみた  
いな小型のカメラでフラッシュたいてパ  
ンシャ写真撮って…というライヴ  
感、手づくりなんていう生  
やさしい言葉では表現できな  
い何かだった。僕は今でも「京  
都CF」には、そのDNA  
があると思つて編集に関わつ  
てます。

» NEXT P.65

## 『300号おめでとう』。とあるイタリア料理店と営業マンとの軌跡

「今回はこの広告枠をCF!さんのお祝いに使いたい」「そんなわけには…。仕入れ先の網元取材  
とかブランドレストランとか、広告という形でこれだけコンセプトがしっかりしたこ  
とをさせていただいて、こちらが大感謝です!」「ブラインド〜なんて、よその雑誌にはよお言  
わない(笑)。吉川君の『(今、〇Xコースが美味しい!)』とか言うなよ!』っていう  
プレッシャーもあるし(笑)。CF!さんの広告については、スポットで打ってスポット  
で回収っていう、費用対効果は無視ですよ!」「青山さんからは、企画広告で『1棒いかか  
ですか?』でいただきたくないんです!」「僕もイヤやったら辞めたらいいのにね(笑)。失礼な話、  
最初は『CF! ?なにそれ?』だったし。でも掘り下げる媒体、と分かったから、  
レストランを通して考えをアピールしたいし、『正義』を出せば来客とか売り上げは後  
から付いてくると思うし…。でもそろそろ、営業担当変えてくれる?(笑)」「イヤです(笑)」



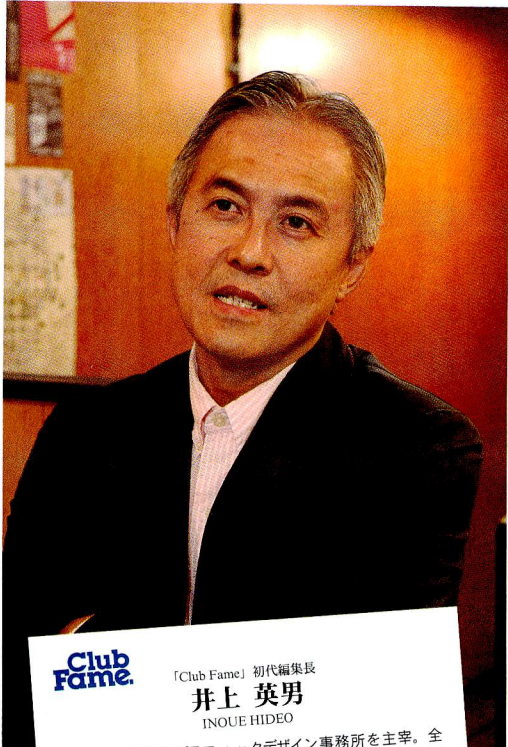
Cara Ragazza 京都 Cino Italian 京都市東山区祇園町南側 573-5 ☎075-532-5100 http://www.cara-ragazza.jp/  
☎ランチ/11:30-15:00 デイナー/17:30-22:00 月休 ※祝日の場合は翌火休

# 「こんな京都に誰がした？俺がした…」 京都CF！300号記念 歴代編集長対談

PART 2

「街に思うことは、好きに書けや！」  
自力で3年。月刊32ページ。

竹「[A CITY FOCUS]を見たプロデューサーの五所光一郎が「君ら、おもしろいことやってるな。ウチから出さへんか？」と。それが「Club Fame」の始まりだ、と訊いているんですが…。井「いや、最初は「A CITY FOCUS」の発展系みたいな感じで、独自に始めたんだよ。元橋(以下・元) バッキーはもともとデザイン&編集事務所を立ち上げて広告営業も自分らでやっていて、まあ最初の頃の「Club Fame」は、情報誌というよりもコラム大会でな感じで辛口なことばかり書いてた。「街に思うことがあれば好きなこと書けや！」ってね。そんなノリというかが



Club Fame  
「Club Fame」初代編集長  
井上 英男  
INOUE HIDEO

80年代に編集&グラフィックデザイン事務所を主宰。全国各誌の編集、「Club Fame」創刊にもコラムニスト、ライター、グラフィックデザイナーとして関わる。現在も肩書きフリーの街の酒場ライター・バッキー井上として日夜酔いつぶれている。最後の晚餐店は開店直後、もしくは開店間際に行く、お寿司屋のような祇園の「安参」。

ルーヴが「A CITY FOCUS」から「Club Fame」に変わってできた。街でいうさい連中が実際一緒に誌面をつくるていく…そんな感覚かな。保 当時、京都には情報誌として「ベリカン倶楽部」というのがあって、ニューウェーブや京都アンダーグラウンドといった動き、自主上映映画や新世代の劇団なんかとリンクしていたんだけど、反面バブルというかイケイケでデイスコでアルマーニな時代でもあった。どっちも自由にドライヴするとか、サーフィンするとかいうか、そんな感覚を持った街の先輩はバッキーさんや元橋さんだった。バ とはいえ、そんなんで広告なんか入らへんやん？ かといって辞めるわけにもいけへん。自力で3年くらいやっただんちやうかなあ。月刊で、32ペー

## 「ゆうめいむいむい倶楽部」 大義名分で育ちました(笑)

竹 まあ、その時にやめはらへんかったから、今の「京都CF」があるわけですけど(笑)。井 ほんでまあ、バブルがきたんや(笑)。街の「意見番もええけど、店からお金をもらってその店を紹介する、と。なんとなくやけど、そういうふうになってきた。人と知り合っていくウチに…なんやろなあ、「Club Fame」だけでなく、京都全体の1年前フェスティバルとか、ダイエーのオープンニングとか、ソニーのイベントとか、頼まれるようになったんよ。その前後にプロデューサーの五所さんが「よんもくや」という輸入雑貨を始めたんや。そこが「ゆうめいむいむい倶楽部」というてたんやけど、そこで「Club Fame」とリンクしていった、そこでまた、チマチマ店からお金集めて…ではなく、街のうるさい奴がやんちゃできる雑誌に「Club Fame」はなっていくわけや。

元 有名なヤツも無名なヤツもおる、と。有名なヤツは有名なままでええ、と。けど無名なヤツを掘り出して、有名にするのが大事なんちゃうの？と。京都にはそんなヤツがいっぱいいるし、これは大義名分かもしれんけど。竹 僕はその大義名分だけを聞いて育ちました(笑)。保 元橋さんは当時、デイスコの生態系を見事にイラストとコピーで語る書き手として「Club Fame」に登場されてい



ますよね。元 僕は大学卒業時点で、「平凡出版(現マガジンハウス)」の「POPEYE」に就職が決まってるん。親戚が「an.」の副編集長をして、「かまへん来い」と。ところが家が呉服屋やさかいに「アカン！」と。あちこち丁稚奉公の先を出されて「修行をしてこい」と。で、「自分の就職先ぐらゐ自分で決める！」いうて入ったのが「十字屋(現・JEU-GIA)」。当時レコードをひと月80枚も100枚も買ってた時代やから。ホンマはレコード売り場に行きたかったけど、サーフィンやってハワイ行ったりしてたから「ほなトラベル(旅行代理事業部)やらせろ」となった。で、当時の「Club Fame」の営業担当が広告目当てに「十字屋(同)」へ来るわけや。その時に僕を窓口に、「デイスコのコラムを書いてくれないか？」てな話になった。バッキーは街で出会って知っていたから、僕の編集者としての心の虫がむくっと起きたんやね、コラム依頼で。保 当時の「Club Fame」はバッキー井上、モックン・カスロー、高村宗也、江弘毅といったコラムニストの名前が燦然と輝いてましたよね。

» NEXT P.87

薬膳カフェ&ギャラリー  
**京都 きれいや**

薬学のプロがプロデュース  
病気に負けない体は  
「健康」と「スマート」

元 薬剤師で病院勤務を経た店長自信、漢方生薬に対し「マズいし、苦しい、本当に効くの？」と疑問だった。そんな中、美味しく飲める「漢方茶」は出来かと勤め先の病院で、漢方生薬を我流でブレンドし、試行錯誤を重ね美味しく飲める「まかない茶」を完成させた。初めは仕事仲間だけで飲んでいただけだが、愛飲しているうちにみるみる体調が良くなったと言う。そんな「お茶」を皆に紹介し「病気を防ぐお手伝いが出来れば」とこのカフェを開店。和漢植物と有機野菜をふんだんに使った斬新な薬膳を披露。女性の内面(健康)と外見(美)の両面から『きれいや』をお手伝い！。

肉はみじんも使わず、たっぷりの野菜と12、3種類のスパイスから生まれた「野菜カレー」はドリンクとセットで1500円。米は合鴨農法のコシヒカリを健康茶で炊いてある。このこだわりはインパクト大！新鮮な野菜を使った「野菜パフェ」は850円。当然、季節により内容は変わります。そこがまた、シンセシ

店内には、店長手作りのかわいいアクセサリーも！まさに内も外も『きれいや』

京都  
**きれいや**

■ 京都市中京区錦市場高倉  
東入ル北側4軒目 八百屋2F  
075-212-3977  
● 12:00~18:00 不定休  
【平均予算】1500円  
<http://www.ist-l.com/>



前「京都CF」編集長 元橋 一裕 MOTOHASHI KAZUHIRO

今の全国誌の京都の取り上げ方に真っ向から異議を唱え、現在、京都を最も知る編集プロダクションと評判の「Tiki Script」代表。モックン・カスローとしての突出した街者キャラクターで、渋く大人な京都を深掘りする辛口コメントの編集者。まさに街のフィールドワーカーである。最後の晩餐は、「楽仙楼」の水餃子と白菜サラダ、「地蔵」の納豆汁うどん、「ふく井」のダシ巻など。

# 「こんな京都に誰がした？俺がした…」 京都CF！300号記念 歴代編集長対談

PART 3

店を使いこなさないと記事は書けなかった

竹 バッキーさんが編集長の頃って、淡泊っていう失礼かもしれないけど、編集長が雑誌と距離を置いてるといふか、あんまり「オレが前へ！」って感じじゃなかったんじゃないかな、と思うんですけど。

井 基本的にオレ、編集するタイプじゃないなあ。  
竹 やっぱ！(笑)  
元 アポイントの時間は守らへんやろ？何時に出てくるかわからへんやろ？「Club Fame」に関わるようになってビックリしたんは、そんなヤツと仕事する企業があるってこと。  
保 取材とかそういう感覚は僕はよく

分かります。取材依頼に対しては、「何日までに(原稿)入れなアカンにやる？ほな今すぐ取材行ってくるわ」という感じ。企画書があって「アイドルタイム」に電話して「料理撮影と内観は別時間：なんていうのは、街的なライブ感を切り取るという感覚じゃない。今はそんな雑誌が多くなってきたなあ。そもそも、店をどう落とす(取材する)か、が命がけやったもん。雑誌の名前言うだけですぐ電話切られたような時代。」  
元 その店を使いこなさへんかったら記事は書かへんかったなあ。今はライターが、その店に初めて行くっていう場合も多いわけやん？それで「美味しい」って書いてあって、そんな店が何百軒もあるのって、おかしいと思うねんけどな。ただまあ僕の代に変わって、雑誌というか、出版という産業が

ビジネスライクになってきたっていう感はある。広告収入と販売収入と、どっちがどうなん？みたいなね。  
竹 メディアとして「Club Fame」さらに「京都CF」となって、ある意味大きくなりましたからね。  
元 そう、大きくなったから(笑)。

「京都CF」＝「全国誌」  
それってビジネスマン？

竹 「Club Fame」↓「京都CF」というのは、京都の中で読まれるものから「全国誌にした」ということ。その意味は真逆に考えれば、京都の1地方誌が全国から注目を集めるメディアになったということであって、それって「A CITY FOCUS」へ巡したようなことでもある気がする。  
元 俺の時代はネットもなくて、口コミの情報しかなかったしな。だから今の情報誌の功罪はやっぱり感じるで、けど前号の特集(08 11月号)はええなあ！オレが辞めてから一番良いって、紙もええし、全体的な流れもメリハリも保。それは竹中編集長の京都の音街としての愛が入ってるからでしょ。それこそが「京都CF」的DNAなんじゃないかな？元橋さん時代がオモシロかったのは、編集に関して、ある種の元橋さんのトリックスター的な動きやモックン・カスローのキャラクターが立つことよって成立していた雑誌だったということ。

竹 バッキーさんと真逆な感じはします。テレビで、ラジオで。芸能界大好き。そういうモックン・カスロー時代をバッキーさんはどう見てはったんですか？  
元 よおバッキーに言われたで、「モックンかっこ悪いねえ！雑誌つくってんのに



ビジネスマンみたいやんけ」って。しよっちゅう言われた。  
井 そうか？  
元 そうやで。いつも言うてた。オレの実家も呉服屋やから遊びながら仕事する、みたいな気風があるねんけどね。  
保 歴代編集長のカラーがきちんと出ているんだけれど、「京都CF」は、時代の気分を現す媒体であって、街と添い寝するっていうのは軸としていていない。金勘定で雑誌を回していると思うたら、「売れる特集を考える」という「最も読者が面白くないと感じる特集をつくってしまう」悪循環に負のスパイラルに陥ってしまう。言うたらアレやけど元橋編集長時代の後半よりも、竹中編集長は苦勞しとるで。苦しんどるよ。マーケティングで物語がつくれないう今の時代だからこそ。

竹 ビジネスライクっていうか、商売ですからね(笑)。売れなアカンっていうのは絶対譲れないとこではありますよ。だってね、ドベレーの新米広告営業社員だった僕が「売らなアカン」いうて上司やら先輩にケンカ売るような可愛くないことを言うてきましたからね。書店はっかりまわってたらそら元橋さんから「ケチヨンケチヨン」に言われた。まあ仕方ないけど(笑)。「雑誌を売りましょう」という考えがなかったんでしょん。

» NEXT P.97

## 京都祇園でおくつろぎ

祇園「ちゃんこみやま」では、ちゃんこ鍋や新鮮な海の幸を使った、こだわりの料理をゆったりと気軽にお楽しみいただけます。

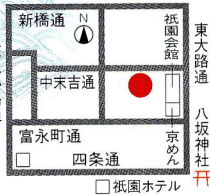
### 鍋メニュー(一人前)

- 塩ちゃんこ鍋.....3,800
- チゲちゃんこ鍋.....3,800
- 海鮮ちゃんこ鍋.....3,800
- ちゃんこ鍋コース.....5,000

### 季節のお料理

- おまかせコース.....8,000
- おまかせコース.....10,000

※季節により、かに・ふぐ・はも・くえ・すっぽん等もご用意致します。



ご予約・お問い合わせは  
TEL.(075)551-0057  
〒605-0073  
京都市東山区祇園町北側347-17  
営業時間/午後6時~午前1時  
www.gion-kamiyama.com

